



昭和48年(1973年)
6月号(No. 336)
社団法人 日本山岳会
(J. A. C.)

目次

集会記事	
山岳図書を語る夕べ	1
本文	
石井鶴三先生の歌	小野 幸 2
献歌 “ウェストン祭の歌”	坂倉登喜子 3
会員通信	
JAC信濃支部	
アンナブルナ隊より	4
グリーンランド便り	4
中央大学アビ登山隊より	4
図書紹介	
自然の心	藤島敏男 5
鳥海山・飛鳥	朝井一男 5
定本松浦武四郎	小林義正 5
総会関係	
昭和47年度事業報告	6
昭和47年度収支決算表	6
財産目録	6
昭和48年度事業計画	7
昭和48年度収支予算	8
昭和48年度通常委員会総会報告	8
会務報告	
図書室便り	
新クラブルーム見取図	9
4月理事評議員会	9
会員異動	9
ルーム日誌	9
復活・新入会員	10
住所・住居表示変更	11

第4回 「山岳図書を語る夕べ」

吉沢一郎・田辺主計・山崎安治氏を囲んで

「山岳図書を語る夕べ」第四回は、二月二十二日午後六時からルームに後記の参加者を得て開かれた。

山の本について高い見識をお持ちの松方三郎氏のお話という予告から参加者は多大の期待を抱いていたが、松方氏は折悪しく流行の香港風邪のため医師から外出禁止を申渡され、講師は急遽、表記三氏に変更された。

このようなときでも、たちどころに本に造詣の深い方を講師に迎えることができるのは、JACのメンバーが多士済々だからという近藤担当理事の経過報告と挨拶のあと、三氏のお話をうかがった。

山登りはスポーツの一種には違いないだろうが、広いスポーツの分野で、本を持つ比重がこんなに大きい世界もまためずらしい。山にはろくに登らないが、山の本ならよく読むという人が多いのも、山の世界で「本」が特別な重味を持っていることを示している。しかし、近年、特に若い人の間に、山の本に対する執着と興味が乏しいきらいがあるように見られるのは、山の世相かもしれない。そうした状況の中で三氏の話は、それぞれに含蓄と示唆に富んだ内容で、本に対する愛着という良い伝統の一つがうかがわれる一タであった。

最初に吉沢一郎氏が、私は山の本を骨董品として買う気は全くない、まして読むために買うのだから初版である必要はなく、二版、三版になれば、初版にはない解説がつくこともある、日本本の本についてはあまり知らないから横文字の本については雑談をしないと、昨今の異常な古書(特に初版本)ブーム批判を言外におわせながら話を始められた。

本はどんなに買い集めたところで基まで持つていく訳にはいかなないのでからそろそろ整理したい。先日、スマイスの本を、『ワインバー伝』の原本など個人的な記念のものを除いてJACに寄贈してしまった、特志の人や世話になった方々に御礼としてわけてしまった、まず近況報告。

存在するものはすべて消える運命にあるという諦観を持っているから、思いきりよく人に貸し出し、あげてしまおうが、その分だけ本棚が空いて、また別の新しい本を買い揃えることができてよい、と意外なほどサバサバした表情である。その後、ここ数年來、雑誌『山と溪谷』に連載されている海外山岳図書紹介の内幕話(これは自分の勉強のためにやっている。この連載のおかげで月に一冊は必ず本が読めるし、新しい本も買える)、イギリスの古書店ガストンの、顧客に対する公正な態度、外国の人々から資料や図書の寄贈をうけたら、必ず答礼に日本の山の本を贈ろう、take and take、ではいけない等々、最近の世相批判をまじえた語り口がつづく。

外国から本が届くと、カバーを外して「著者紹介など」をその本の見返しに貼っておくという本の整理方法を現物持参で説明されたり、欲しい本があったらあわせて買おう、同じものがもつと安く他所で見つかった損をするという失敗談も披露された。最後に、来年のALPINE JOURNALに親子で原稿を書くことになったという報告のとき

は、さすがに頬がゆるんでいるようだった。

つづいて田辺主計氏が、山の本と本を通じての交友のたのしさを淡々と折目正しい口調で話しはじめた。JACに入会してたくさんさんのよい友だちを得たが、そのほとんどが、山に登るときの友だちだった。木暮理太郎、近藤茂吉両氏は、友だちというより先輩で、ともに山に登ったことはなかったが、この二人からも、山の本を仲立ちとして多くの薫陶を得たと話され、また愛蔵する山の本とつかは別れるときが来ると思うと身の毛がよだつという書簡をいただいたと、深田久弥氏のことにもふれられる。そして、一九五八年一月十九日、松方三郎氏邸で、佐藤久一、島田巽、望月達夫の諸氏と本を『むさぼり』読む一葉の写真を示され、欠食児童という言葉がありますけれど、これは欠本児童のようですねと、本に対する愛着の一端を披露された。いまの世からは失われてしまったかに見える『謙虚』という言葉と行為が、田辺氏のものとなって聴く人の胸にしみこみ、その物静かな語り口に窓外の喧騒も消え、冬の夜もまた価千金の重みを持つてくる。

山の本から最近では遠ざかっているから、そのころのJohn Muirの書いた「Stickeen, the Story of a Dog」をとり出されて松方氏との交遊のたのしさを語られた(R. L. Stevensonの詩集「A Child's Garden of Verses」のしやうじな小形本を紹介、書中の淡彩の挿画に自分で彩色して愛読されているとのこと)。

私は毎日コーヒーを飲みに行くが、喫茶店で好きな本を読んだり、未知の隣り合わせの人と本の話をするのはたのしい、私は本なしでは生きていけない、自分では気のきいた言葉はつくれないが、本で読んだ言葉を他の人にとりついでいくのは、大きなたのしみだと、しみじみとした話が静かに終る。

最後に、山崎安治氏が、山の本を蒐集するコツでもいった内容で、実例を引いて具体的に話をすすめてくれた。たとえば、エヴェレスト関係の本ならば神田ですべて集められる、のみならず世界のたいていの山の本は日本の古書店で探し出すことができるのだから、これは不思議な国だ「Himalayan Journal」の揃いが神田に「ぞろぞろ」並んでいるのだからと、山の本の世界の隆盛ぶりを紹介されたあと、欲しい本を求めのなる古書展の目録を送ってもらったり、めばしい古書店に名刺を置いてきて連絡してもらおうとよいと具体的に教示された。そして先日『登高行』の揃いが十六万円で見つかったのでJAC図書室用にとねらったが、一足違ひに人手に渡ってしまったが、私もまた豪華本が欲しいのではなく、調べていることの資料として買いたいのだから、最近の古書の異常な高騰は困ったことだと話される。

そうした反面、地方で出版される地味だが密度の高い山の本がたく見落されがちなのは残念なことだと、山形

新聞社の吾妻、飯豊連峰などのシリーズもの、信濃毎日新聞社の戸隠の本などを紹介された。そして直接山の本ではなくても、地方で郷土史的な立派な本が出ているのを忘れてはいけない。まして、山の本は飾って眺めていられたいというのではなく、それを読んで血肉とするのが大事だと話をしめくられた。

出席者 野上成勇、内田博、伊藤博夫、近



深山群猿

石井鶴三先生の歌

小野幸

本会の永年会員、石井鶴三先生（芸術院会員・東京芸大名誉教授）には親しくご指導がっつておりましたので、なにかと勝手なお願ひばかりしておりました。そのひとつは先生から歌をいただいたことでもあります。

戦後、間もなくだったと思います。成田の拙宅に遊びにおいでるとき、私に奈良をうたわれたご自作の歌を万葉仮名で書いてくださいました。そのとき先生は「わたくしは興がわきますと必ず歌をつくります。しかし、紙にそれをとめませんので、わたくしがなくなりますと、そのまま歌も消えてしまふわけです」といわれたことがありました。

昭和四十三年、私は友人と随筆をあ

藤信行、桜井信雄、山崎安治、松家晋、石田要久、高遠宏、吉田久兵衛、野口未延、山田哲郎、福田宏年、千葉保之、板倉勝正、千葉重美、藤島敏男、村井米子、河野悠二、須田紀子、倭島進、高島真一、奥井清、山本良三、横山厚夫、斎藤桂、田辺主計、浜野正男、吉沢一郎、市吉昭子、中川恵資、伊倉剛三、武田満子、大森久雄（順不同）

つめては、月刊の同人誌を出すこと

きめたとき、早速先生のお宅にうかがって題字をお無心いたしました。数か月して「おかげで習字の練習をさせていただきました」と誌名の「行楽」という字の横書きをいただきました。そして、その初号から連載を太田三郎画伯（木暮理太郎先生の紹介でおつきあい申しあげていた洋画家）にもせびって、絵と短文をいただいておりますが、太田先生は数回して、急遽されました。早速、鶴三先生におねがい申し頭の中にしてある先生のお歌を毎月数首ずつでっけこうですから引出してくだささい、と申しあげました。それから間もなく封書をいただきました。

「先日のお話にしたがい、拙詠とカ

ット同封お送り申し上げます。明治卅六年作と記しましたが、書きつけ置いたわけではなく、胸中に長年蔵していたこととて、そのあいだに変形のあることは当然であります。発想感動ともいふべきものは、その時のものであることに相違ありません。

次にへたなうたではありますが、うたは音声をたつとぶべきものと考えますので、文字に書く場合はかなぎにすることにしています。また、かなづかいも新制にしたがいかねるのです。

うたをかなぎにした先輩に会津八一氏があり、氏のかなぎきは一字一字の間を均一にするようにくくなるので、単語の識別を便ならしむるようにと、その間を加減して、そこに一字あけるように活字を組むようにされたので、大変よみ易く、これはよいと思ったので、私もそれにならったのであります。が、会津さんの説によると、こういう組み方は現行の小学校教科書が実行しているところと新奇というわけでないということとです。（略）このたびのように二三百首つといわれると気がるにできます。

こうして昭和四十四年春から最後の病氣になられたまで、二十九回のな



浅間登山

浅間登山（明治三十九年）
あさまやま よるをのぼると
かんでらのひをあまりと
しやまみちをゆく

つねはうへにみてあし

くもがめのしたにある
がふしきさうみのごとく
なる

くものうみにはるかに
うかぶやまなみはひだのや
まかもあなかうがうし

のぼりたちのぞくくわこうは
くわうくわうとおとすさまじ
くそこつひはもゆ

本會路飛驒路（明治四十一年）
おんたけのやまごやのよる
やまびとがうたひてくれし
きそふしのうた

やまびとがうたふきそふし
はまびとがうたふには
にずやまがさびたる

きそだにゆひだへこゆる
とわがたどるたうけち
きくほととぎすのこゑ

ともつれてたびゆくをんな
とみちづれになりにけるか
もひだのやまに

そこばくのいへむら
あだのにはこしよといは
すをんなたびとは

針木嶺（明治四十二年）
かがはのいはらをひとひ
のぼりきていはほのしたに
こよひをこやる

なにしおふはりのきたうげの
だいせつけいあしふみしめて
かしこみのぼる

のぼりたてばあなやひらくる

たいくわんにむねをどらして
めをみはるかも
やりがたけのみねをかすめ
ていちだんのくもながれ
ゆくなんたるさうくわん



針木嶺

山中静寂（明治四十四年）
しづけきにきこえる
はしづけきかななるがく
のしらべにやある

しづけきかななるがくの
ねたかまるやいやふかみ
ゆくやまのしづけき

しづけきかななるがくの
くしきしらべやまのすだま
がかなでてやある

やまのすだまかなで
らしかそけくもくしきしら
べにみみすますかも



山中静寂

確水初冬（大正二年）
やまにかりうどにあひ
さりげなくまをみでやと
とはれけるかも

きのふよりひとつのくま
をおひめるといひてかり
うどたばこすはむとす

くまをみてやそのひとこと
のやまぢゆくわれにはゆ
ゆしくここに にかかる

たそがれて たどり つきたり ひ
なぐもり うすひのおくの
ひとつ ゆのやど

くまは ますます さるも きま
すと ゆのやどの をんなある
じは ほほ急みて いはす

八ヶ岳
山上自画像



八ヶ岳山上自画像(大正五年)
やまのうへに かがみとり
いで わが かほの うつれる
みれば つねの かほに はず

やまのうへに じぐわさう
ゑがく やまにきて やまをと
こめく わが かほ ゑがく

ひに やけて あかき わが か
ほ こんべきの ふかく すみた
る そらに うかべる

こんべきの そら よも に た
れそのすそ の やま ちかき
ところ きい に そまれる

きり ふかく やまは みえなく
はひまつ の なかに こもらひ
じぐわさう ゑがく

阿蘇山(大正六年)
はろばろ と しらぬひ つくし
のくに にきて こほしき わ
きもと あひみつる かも

いも が いへは をかの う

へにて たらねと やすら
に すめる みれば うれしも

けはしからぬ あそやま なれど
げた はきて ひがきをさして
ゆくか わきも は

いささかの だぐわしを かひ
ていもと われくひつつ ぞ
ゆく あそやまの みち

みどりなる せんりがはまの
くさはらに ふたりわが み
る けぶり ふく やま

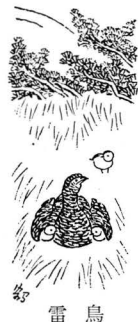
雷鳥(大正七年)
あめに ふられてんとに こ
もり いこひをれば まちかく
きこゆ らいてうの こえ

いでて みれば らいてうの お
や ひなを つれ あそび ある
なり こさめ の なかを

ちかつきて わがみて あれど
らいてうは おそれげも なく
あそび ある かな

かうざんの はな さきにほふ
くさはらに らいてう あそぶ
たぬしき ひととき

くさのうへに うづくまりた
る らいてうは つばさの し
たに ひなを いだける



深山群猿(昭和二年)
さけびごゑ なにぞや みれば
む

かつをに おびたしき かなや
まさるの むれ

ばさばさときを ゆすぶりに
いづくへ かさる おほかた
は さりゆける かな

ふかたにを きよりきへ
とぶ やまの さるきを ゆ
すぶりに かるがるととぶ

おいさる かひとりの こりて
きに すわり うごくとも せ
ず しりを かきある

おいさるの あるきの ちか
くすきたれば よくみたる かな
そのさるの つら

初夏新緑(昭和九年)
ゆのまるの やまにのぼるや

獻歌「ウェストン祭の歌」

「ウェストン祭の歌ができるまで」
去る昭和四十七年八月号の日本山岳
会会報NO三三六号巻頭で、「ウェス
トン祭に捧げる歌」の作詞について、
会員の御協力を希ったところ、思いが
けず「ウェストンとその探険」の訳
者で、ウ氏の山行や業績に対して一番
の精通者である岡村精一先生から、明
春三月頃までにお作り下さる旨の申出
を受け、私は大喜びで是非お願いした
いと依頼をした。

今年のウェストン祭に歌うためには
四月頃には完成しなければならぬとい
いうことで期間も短かくまことにご無
理なお願ひであったが、三月二十日頃
を約して、お病氣の中にもかかわらず
左記の作詞をお送り下さった。

学者肌の岡村先生が、たとえウェス
トン師の精通者であられたとしても、

ひさかたの あめは ぶりき
ぬふりて やまぬ かも

つがのきの はやし の なか
に しやくなげの うすくれな
の はなさはに さく

はつなつの やまに みいでぬ
あつよりさう めづらしき はな
ひそやかに さける

さみどりの からまつ はやし
のうへは かるかけぶり ふける
は あさまが たけか

はうばくの うま かけきたり
とどまりて わをみて ゐたる
がまた かけて ゆきぬ

(以上)
一四八・五・五一

坂倉登喜子

作詞となれば大変なご苦心だったこと
と、推察された。

歌い続けて十五年、私たちは茗溪堂
発行の山の歌集の中から、選んだ二
三の歌を碑前で歌ってきたものの、ウ
ェストン祭らしき情感が何としても
もり上ってこないままに、同じ歌を何
年も続けてきたに過ぎなかった。

私たちの希いは、やはりウェストン
祭にふさわしい歌を歌いたいというこ
とと、碑前祭に参加した皆さんと、一
緒に歌える歌が欲しいと思ひ続けてき
たのであった。

そこで先ず最初に考えついたのが、
JACクラブソングがあったら……
という希ひであったが、永い歴史と日
本を代表する山岳会のクラブソングで
あれば、永久に残るものである以上、
そう安々とはいできないものであること

を、漸くさとりじつくりとその機会を
待つことにした。

私たちの本心は、ウェストン祭に歌
える歌が欲しいというのが目的であつ
たため、去年のウェストン祭前夜、五
千尺旅館のロビーで高山前支部長と平
野先生との歓談の折、来年こそ是非
「ウェストン祭の歌」を話し合つた
ことであつた。

その歌が今年六月のウェストン祭ま
でにでき上り、歌えるような運びにな
つたことは、私たちにあって、この上
もない喜びであると共に、大先輩の協
力奉仕による歌を、歴史的な記録とし
て、書き残して置きたいと思つた。

作曲はJACクラブソングをと希つ
た当時、三年余り前より首を延ばして
待つておられた前立教授であり、現
在も音楽史を音大で講義されておられ
る辻莊一先生から、その折お申し出た
だりいただいたので、早速岡村先生よりお
送りいただいた作詞を携えて、目白の
辻先生のお宅を訪れた。

音楽専門家であり、山の先輩として、
年次ばんさん会などで時折お目に
かかつてはいたものの、ゆつくりお話
を伺うのは始めてで中学生時代上高地
でウェストン師とお話をされた時の思
い出話を聞き、この歌の作曲にふさわ
しい方の御協力を心から嬉しく思つ
た。そして約一ヶ月先の四月中旬頃迄
にお願いして帰った。

いつか一ヶ月がたち、四月十六日に
お電話申し上げたところ、「期間が短
かくてなかなか思うようにできなくて
快心の作ではないが、ひとまず今年は
試作としてこれで間に合せて貰つて、
今年のウェストン祭に間に合せるよう
にして欲しい、またゆつくりと期限を
きらずに、チャンスを得て、もっと気
に入れた素晴らしい夢をもったものをひ
ねり出して見たい」と、おっしゃって
四月二十日お渡し下さることを約束し

ていただいた。

早春三月、最初にお訪ねした時は梅句う頃だったのに、四月中旬伺った頃には広いお庭にいろいろの花が咲き、西洋はなみずきの白い花や、美事な洋らんが花をつけ、数十本のばらの花がふくらんでいた。

そんなうららかな春の光の満ちるお庭の見える室で、作曲できた歌をピアノの伴奏に合わせて、歌う時の注意などの説明を聞き、楽譜を受取ることができた。

早速その夜コーラスグループの人たちが、野尻会員宅に集まり、初合唱し、五月九日の「ウェストン祭のためのコーラス指導」にいつもおいでいただき、立教の平野先生をお願いして、新しい歌を練習し、二十九日のウェストン祭の準備会に、参加者全員で練習を重ね、コーラス部としての練習を重ねて、来るべき六月の土曜日の本番初合唱で、発表にこぎつけたと考えている。

『会員の協力による作詞、作曲でできた歌』作詞者岡村精一先生、作曲者辻莊一先生共に、常々日本山岳会にお世話になっているから、作詞作曲をお二方が、率直的に協力下さったという、誠に嬉しいお申出を受けたことは、いつだったか土曜会で山崎安治氏や二、三の方々と話したのがきっかけで、是非作りたいものと思つたものが、漸く実現されたと思うと、嬉しさがこみあげてくるような喜びを感じる。

歌い続けて十五年、私たちの歌の奉仕も漸く実をむすび、ここにウェストン師に歌を奉げられる山開きの日、碑前祭の発表の日も近づいた。

ウェストン祭が続くかぎり、上高地に集まる会員や、全国から参加する岳人たちが、心はずませながら、末永く歌い続けられることを希いつつ、ここにウェストン祭の歌の完成を祝つて、来る六月三日の碑前祭に、穂高の峰に

響けとばかり、声高らかにこの新しい歌の歌える日を心待ちに、待ちながら、大先輩の辻莊一先生及び岡村精一先生両氏の、日本山岳会への奉仕と、あたたいお心づかいに、会員の一人として、心から感謝の意を表する次第である。

なお上高地に建設中の山岳研究所が、ウェストン祭までに完成すれば、開設時に歌の発表を予定したが、竣工不可能の由、信濃支部より連絡があったので、ウェストン祭の歌の発表は、六月三日碑前祭で行うことにした。

ウェストン祭の歌

岡村精一 作詞

大空に そびえて光る 日本

北 中南 アルプスに

胸をうたれて ふみ続け

その名を世界に つたえたる

日本の友 ウェストン

ウォルター・ウェストン

連嶺の 輝くうねり 山びとの

純な心に みせられて

三たびおとずれ たましいの

ふるさととして 慕いたる

この国の友 ウェストン

ウォルター・ウェストン

穂高あおき 梓はながれ 小裂咲く

ゆかりのこの地 伝えん

年ごとついで 高らかに

歌われら わこうど

青年の友 ウェストン

ウォルター・ウェストン

作詞者岡村精一氏はかねてから御病気でしたが、ウェストン祭の前日に当る六月二日、この歌の発表に先立って逝去されました。慎んで哀悼致します。

会 員 通 信

JAC信濃支部アンナブル隊より

拝啓

長い間無音に過ごし恐縮に存じております。昨四月四日、漸くB・Cの建設が成り、四三〇mの水河堆石の台地に数張のテントを張ることができました。もともと荷物と全員が集結できるのは明四月六日になりそうです。今回のポーターの問題には全く苦しめられました。三月十四日ボカラを出発、雇傭した一七四名のポーターで、スイケット、カール、サビット、タバニ、ガーサを経て、三月二十日チヨイヤと、カリガンダキに沿って好調にトレッキングして参りましたが、ボカラ出発を二日後らせたにも関わらず、山岳地帯の積雪が消えず、おまけにチヨイヤの部落で大部分おされたポーター達の半数が、山を見ただけであんなくダウン。隊員やシェルバの一所懸命の説得で動き出した者も、ニルギリから派生した長大な尾根を越える、フランス隊のいわゆる四月二七日のゴルトラには雪に悩まされ、もうこれ以上挺子でも動かぬということで、三月二十四日には、まったくお手上げの状態になりました。それでも、隊員は全員三五〇〇mの森林限界のキャンプにおいて、改めてわずかに残留した二十名余りのポーターに靴や衣類を貸し、隊員、シェルバも協力しあつて、三月二十八日全量を四二二〇mの雪中キャンプに上げました。

予想していたよりはミリスティール側の雪の量が多かったのが最大の原因ですが、サードの若年のせいではポーターの押さえが利いていないという不満を持つ隊員もあつて、いささか憂鬱な日が続きましたが、この雪中キ

ャンプからB・C迄二日行程で何回か往復させる。その代わり、一日三〇ルビーを支払うという条件で、新たに加えたポーター二十数名も入れて、まるで尺取虫のような作業を続けて参りました。もともとこの二日は普通なら三日行程の所で、ニルギリの東斜面を横断し、長い河原沿いの路を歩いて、漸くアンナブル水河の末端部に辿り着くという、誠に長い道程で、さすがのポーターも二日では帰れない者の出る始末。私どもでは考えるだけでうんざりする所など、それにしても河への下り口など、この一ヶ所を除いては他にとても可能性のない断崖続きで、二十何年か前のフランス隊の辛苦を改めて思いやつた次第です。

B・C入りが遅延して正にいららるのし通しでしたが、四月一日、松永、降旗、牛越の三名がポーター二〇名をつれてB・C予定地に入り、風と雪の中でネパール国旗と日章旗、山岳会旗を上げ、翌日、堀内、高橋、新谷が到着して徐々に充実。三日には松永ら三名で五二〇〇mのC1予定地にテント一張り、若千の装備を上げ、この三日間ばかり、隊員もシェルバもフル回転で荷上げをしております。

本日、全員がB・Cに揃い、明日隊員三名程度がC1入りをする予定でおります。C2の予定地(六千m)は先の二隊が苦しめられた通り、水河の極力慎重に、高度との関係もあり、ピスタリピスタリで歩を進めて行く予定です。

皆様の御支援に感謝し、とり敢えず現在迄の御報告を申し上げます。敬具 日本山岳会御中(四月五日松永記)

グリーンランド便り

二月四日シオラバルク出発、グリーン

ンランド北西海岸の沿岸水の南下の旅を無事片道、南部ウバナビックの町に三月二十一日到着しました。十二頭の犬と共に一人、三メートルの橋で四十五日間、千三百Km、チュレ地域とウバナビック北部の村の間のメルビルベイの無人の四五〇Kmの南下は深雪にやられたり、氷山に先行をささげられたり、海水に橋をもぐらしたり、鼻先きを凍傷にやられたり、かつて経験したことのない厳しい旅でありました。今、折返しミオラへ向け再び旅についていますが、四月に入れば気温も高くなり、大橋も楽しめると思います。四月末ミオラ着。五月には北極海へ。六月末頃帰国予定。皆様によろしく。三月二十七日。ウバナビック北部にて(三田会長宛) (植村直己)

中央大学アビ登山隊より

前略 中央大学アビ登山隊につきましていろいろと御世話になり誠にありがとうございます。三月六日カトマズを出発いたしました。四月一日無事アビ南面チャムリヤ谷の源頭近き雪原にベース・キャンプ(三九〇〇m)を設営することが出来ました。四月六日には四八〇〇m地点にC1を設営し、西陵より西峯(七一〇〇m)を経てアビ本峯にむかう予定しております。

隊員(八名)シェルバ(六名)リエゾンオフィサー等全て元気です。四月中には上部キャンプの確保、五月上旬には登頂を予定しております。

いろいろとお世話になり誠にありがとうございます。今後共、よろしく

お願い申し上げます。 敬具

アビB・Cにて 四月五日

(市川邦治)

図書紹介



自然の心

佐藤達夫著

會員佐藤氏の隨筆集である。内容は○自然を愛惜する心。○吹上御苑と那須。○花々の四季。○草木遍歴。○私の恩人たち。の四部に分れ長短四十三篇の隨筆がおさめられている。

少年時代から植物を愛し、大学にはいつからか、法学部に籍をおいて植物学を専攻し……などといやかされながら……(一五〇頁)といった具合だから植物学への執心は、趣味とかホビーとかいう程度の生易しいものでない。本職はだしとか玄人も顔負けとでも申すはかない。

「自然は、私にとって、敬虔な礼拝の対象であり、方心浄化のみそぎの場であり、また草木や鳥獣たちとの交歓の場である。……中略……しかも残念でならないのは、その豊かで美しい国土が、開発の名によってつきつきと破壊されていくことである。……中略……私はそういつた嘆きをこれまで機会あるごとに書きつづてきた。……後略」と「あとがき」にあるように、書中いたるところに著者の自然や植物に対する深い感情と観察が、さりげなく読者の心にかかるかと引張つていくような筆致で――著者からはさりげなくどころか推敲に推敲を重ねてであると叱られるかもしれないが――綴られ、植物学に無縁のものにもまことに興味ふかい。

収録された文章の掲載紙・誌が巻末に記されているが、私など聞いたことも見たこともない刊行物に寄稿されたものが数多くあつて、一本にまとめられなければ、これらの珠玉のような隨筆はどこへ埋没してしまつたろうとおもふと「自然の心」として上梓されたことを心からよこごたい。

著者は「国会のまっ最中で、私は毎日議事堂に詰めきりの状態だった。……はなはだ残念ながら、とても抜けられない、いすれまた……(四十八頁)と吹上御苑のラシヨウモンカズラのみことと咲いた花を拜見できなかったことを残念がついていられる。国会の愚問愚答などとは無縁の閑事院入りをされてラシヨウモンカズラは勿論、花は見頃を逃さず、頼まれればとどしどし名隨筆をものして、さらに私達をよろこばせて欲しいとおもう。

本書は昨四十七年九月毎日新聞社刊(六二〇円)だから、八百屋か果物屋の店頭みたいに、少しふるくなったものでは探がいても見当らぬ日本の小売店では、すぐに入手出来ぬかもしれないが、出版元にはまだあるにちがいない。一本を購つて讀まれることを切にすすめる。

(一九七三年四月記)

藤島敏男

鳥海山・飛鳥

山形県総合学術調査会

昭和四十四年から三年間にわたる動物班、植物班、地学班、地理班、考古班の四十余名の学究による自然環境の調査報告書で、新旧の登山史(二七三―二八八頁)、観光開発、農業、漁業の項目もある。紙質上等、布表紙。

ある地域を多面的に研究することが有益、且つ興味深いことは言うまでもないが、地方自治体が企画し、しっかりした報告書を地元で出版したことは、新制大学の整備が進んだことと相俟つ

て、郷土の教育、文化、産業の発展に好い効果を与えるであらう。本書は、庄内地方のみならず県内の初等から大学に至るすべての学校の先生方が参考書として活用されるのに適していることは、未だ通覧の暇無い筆者の管見からでも言えるであらう。筆者は、何度が登った鳥海山、四十余年前に訪れた飛鳥、飛鳥の本土との距離の観測に関する話を寺田寅彦先生から直接に聞く機会を得た等のゆかりもあつて、登山者として通読してみたいと思う。それにつけても、地球物理学が全く触れられていないのが残念である。

鳥海山特産の気品ある高山植物チヨウカイフスマは旧制山形高等学校の校章とされ白線帽に誇らしく戴かれたもので、命名先取権によりメアカンフスマと同じ学名が認められていたのは周知のことであるが、前者は変種として後者とは明らかに区別し得るという見解が最近発表されたという本書九〇頁の記載により、専門外の筆者も学名改訂の由来を知り得た。

巻末の座談会記事はやや整理不足で論旨の分りにくい所もあるが、環境保護における政治、行政の手遅れに対する発言は当然である。スキーヤーが塩をまく問題は月山でも起こった。自然環境の調査が一応この様にできたのだから、保護の方も果は遅れずに本腰を入れたらいい。

昭和四十七年十月刊 B5判
本文四二頁 非売品

(朝井一男)

定本松浦武四郎 上・下巻

吉田武三著

わが国近世における幕末より明治にかけて最大の探検家であるとともに、国士であり、父であり、哲人としての面をあわせもつ松浦武四郎が、明治政府の開拓判官として、北海道、千島、樺

太全城にわたる詳細をきわめた大なる調査記録と地図作成の偉業と、日本全土に足跡を遍く旅行家、さらに晩年七十歳に及んで、三回も大台ヶ原踏破を企てた情熱には、もっと注目されなければならぬ。これに見落されていく感があるが、絶無なわけではないけれど、忠実に遺著と遺稿を精査研究し、遺族関係者のこころを尋ね、さらに北海道とその生地伊勢と大台ヶ原等を十数回現地調査して、執筆に慎重を期した本書はたんなる伝記ではなく、研究的評伝としての特色がある。

松浦武四郎の事蹟については、改めて喋々するまでもあるまい。

明治維新のとき、武四郎すでに五十歳、伊勢の郷土の末子に生れ、数奇な運命を辿りつづ、四国、近畿、山陰、山陽、九州をあまねく遊歴、誰れから命ぜられたわけでもなく、蝦夷地をきわめたい発心からはじめて同地へ渡ったのが弘化二年(一八四五年)であった。樺太も含め、それから六回にわたる蝦夷地探検がくりかえされ、安政五年(一八五八年)に終わった実地踏査の結果、「蝦夷地山川取調図」の大作が完成する。これは経緯度一度ごとに一枚とした計二十枚の地図と紀行二十二冊にわたるものであった。この仕事に付随して、アイヌ語の著作や、蝦夷人物誌のごとき貴重な研究も生れている。

またこの大事業を持続させたものが、生来の探検心に加えて、藤田東湖、吉田松陰らと交わった志士の抱負にあったこと、明治新政府に抜擢されて、「北海道」という新らしい名称の名付け親となりながら、まもなく在野生活を選んだ廉直・自由な精神など、この本の叙述はひろく読まれるに値するものをもっている。

著者吉田武三氏は作家としての経歴十四年、著書十三冊、松浦家とは何の

ゆかりもない。したがってこの著者は松浦家から依頼されたわけでもなく、戦後松浦武四郎を主人公に地方の新聞紙に連載小説を書いたのがきっかけで、銅路の銅像除幕式に参列を乞われたりしたが、伝記の話は、その後具体化したものらしい。

いわゆる伝記があまり世間から迎えられるないのは、事実を尊重し、正確を心がけるあまり、無味乾燥な固いものになるか、さもなければ自慢か、手前味噌か、過褒になるため嫌気がさすからだ、と、著者はいう。伝記文学は著名の人物と社会に対する鋭い批評、史眼の働いたものでなければならぬ。つまり、後ろ向きな伝記でなく、前向きの伝記であることが大切である。

武四郎の有名な一書斎は南葵文庫の手を離れてから、所在が不明のところ、著者の探索により、三鷹市国際基督教大学の泰山荘に原形のまま、損われことなく保存されていることが明らかになったのも喜ばしい。

著者は、平素頑健といわれる体軀には恵まれていない。しかも北海道へ十三回、三重県下へ八回、大台ヶ原へ一回足を運んでいる。文字通り疲労困憊しつつ、まとめたあげた松浦武四郎伝は、著者の執念といったものを感じず。故人もよき紹介者を得たというべきである。(小林義正)

春の叙勲、受章會員

去る四月二十九日発表された春の叙勲の際、次の会員の方々が受章されました。お祝い申し上げます。

- 勲二等瑞宝章 須賀太郎
- 勲三等旭日章 西堀栄三郎
- 勲三等瑞宝章 岡田喜一
- 勲三等瑞宝章 近藤喜雄

(敬称略)

昭和47年度収支決算表

収 入		自 昭和47年4月1日 至 昭和48年3月31日	
科 目	収 入	決 算	予算に対する 決算増減(△)
経 常 収 入	7,000,000	9,231,551	2,231,551
入会費	1,000,000	1,220,000	220,000
年会費	6,000,000	6,120,962	120,962
過年度会費		887,625	887,625
終身会費		602,964	602,964
事業収入	5,590,000	3,343,660	△2,246,340
山岳広告料	800,000	405,000	△395,000
山岳報記事料	200,000	241,600	△41,600
山刊物印刷料	500,000	500,000	△500,000
その他事業収入	4,040,000	2,165,560	△1,874,440
雑収入	470,000	673,612	203,612
利山岳診療金	200,000	257,062	57,062
貸付金	20,000	29,500	9,500
その他雑収入	250,000	37,620	37,620
小 計	13,060,000	13,248,823	188,823
前年繰越	6,453,810	6,453,810	
合 計	19,513,810	19,702,633	188,823

支 出

科 目	予 算	決 算	予算に対する 決算増減(△)
運 営 管 理 費	7,328,000	6,931,593	△396,407
手文具	2,050,000	1,964,700	△85,300
印刷通信	80,000	94,875	△14,875
交通家保管諸光電交備振支福雑	420,000	446,901	△26,901
除繕会	300,000	537,568	△237,568
税	1,850,000	1,631,250	△218,750
熱話議際品替運厚	1,190,000	1,179,728	△110,272
部利	21,000	42,600	△21,600
業	100,000	181,500	△81,500
報出	57,000	56,165	△835
山岳出版	150,000	145,154	△4,846
山岳出版	150,000	132,615	△17,385
山岳出版	50,000	38,307	△11,693
山岳出版	150,000	127,410	△22,590
山岳出版	350,000	77,330	△272,670
山岳出版	90,000	77,250	△12,750
山岳出版	100,000	57,400	△42,600
山岳出版	120,000	5,120	△114,880
山岳出版	100,000	125,720	△25,720
事業費	6,860,000	3,288,387	△3,571,613
山岳出版	1,200,000	1,239,436	△39,436
山岳出版	3,300,000	10,000	△3,290,000
山岳出版	930,000	892,846	△37,154
山岳出版	200,000	138,435	△61,565
山岳出版	100,000	10,000	△90,000
山岳出版	100,000	60,000	△40,000
山岳出版	150,000	53,380	△96,620
山岳出版	580,000	884,290	△304,290
山岳出版	300,000		△300,000
予備費	300,000	273,407	△26,593
山岳研究所建設費貸付		2,000,000	2,000,000
小 計	14,488,000	12,493,387	△1,994,613
繰越	5,025,810	7,209,246	2,183,436
合 計	19,513,810	19,702,633	188,823

財 産 目 録

昭和48年3月31日現在

1. 基本財産

種 類	預 入 先	金 額
貸付信託	日本信託銀行本店	100,000

2. 運用財産

1) 保証金

種 類	預 入 先	金 額
保証金	欄向井建設	6,000,000

昭和47年度事業報告

- 登山の指導と奨励に必要な集会、講習会および展覧会の開催
 - 集 会
 - 4月21日 全国支部長会議 (成蹊クラブ)
 - 5月20, 21日 第10回木暮祭 (金山平)
 - 6月3, 4日 第26回ウェストン祭 (上高地)
 - 6月5日 第283回小集会
ノルマン・ハーデー氏を囲む会 (本 会)
 - 6月16, 17, 18日 第3回現地支部長会議と記念山行 (鳥海山)
 - 7月20日 第284回小集会 (本 会)
・拓殖大学ヒンズークシュヒマラヤ遠征報告
講師 菊 地 修 身氏
 - ・電通大学第一次ヒマラヤ学術登山隊報告
講師 西 山 忠 成氏
 - 8月20日 第285回現地小集会 (秋川国際マス釣場)
 - 9月20日 第286回小集会 (千代田公会堂)
映画と講演の夕
講師 伊 藤 礼 造氏
映画 マナスルに立つ
 - 9月23, 24日 第287回小集会 (八ヶ岳野辺山高原)
 - 9月30日 岩永信雄氏を囲む会 (本 会)
 - 10月20日 全国支部長会議 (本 会)
 - 10月20日 第288回小集会 (本 会)
パネルデスカッション
「日本山岳会員としての意見と自覚」
 - 10月25日 杉浦耀子氏を囲む会 (本 会)
 - 11月4, 5日 第15回もみじ会 (南アルプス大日高原)
 - 11月11日 武田久吉氏, 鳥山徳成氏, 田部重治氏
追 悼 会 (OAG会館)
 - 11月20日 第290回小集会 (岸記念体育館)
ナダレ シンボジュウム
 - 12月2日 全国支部長会議 (京王プラザホテル)
 - 12月2日 年次晩餐会 (京王プラザホテル)
 - 12月20日 第291回小集会 (本 会)
忘 年 会
 - 12月22日 第292回小集会 (本 会)
・ニュージランド親善登山の記録スライド
と解説 国鉄山の会
・マナスル西壁8ミリ映画
高 橋 昭氏 製作
 - 1月14, 15日 第293回小集会 (八方尾根中大山荘)
スキー懇親会
 - 2月22日 第3回山岳図書語る夕 (本 会)
講師 田 辺 主 計氏
講師 吉 沢 一 郎氏
 - 3月22日 辻村太郎氏秩父宮記念学術賞 (本 会)
受賞祝賀会
 - 3月29日 山岳史懇談会 (本 会)
講師 三 枝 守 博氏
 - 展 覧 会
 - 12月2日 「この一本展」 (京王プラザホテル)
武 田 久 吉著作展
- 登山施設の改善促進、その他登山のための適切な事業
上高地山岳研究所の増築工事に着手、昭和48年5月末完成を予定している。
- 山岳遭難の予防とその対策に関する企画および指導
7月～8月富士山頂に診療所を開設
- 自然保護活動の推進
大雪山縦貫道路開発について関係官庁に要望書を提出するとともに、国立公園地内における山岳地の自然保護運動に協力
- 海外登山の企画及び指導
信濃支部アンナプルナ1峰登山実施
隊長塚本茂樹他10名にて48年2月出発した
機関誌「山岳」、会報「山」、「山日記」および「山岳」覆
刻版の刊行
 - 「山岳」66年10月発行
 - 会報「山」322～333号の12回発行
 - 「山日記」1973年度版(38巻)を48年1月発行
 - 「山岳」覆刻版第2年2号, 3号, 第3年1号を発行
- 目的を同じくする外国の団体との情報交換
 - 30ヶ国65団体と情報を交換した
 - U.I.A.A.(国際山岳協会連合)総会に神原達理事が出席
(8月29日～9月6日 於:モントルー)
 - 第6回国際気象学会に中島道郎会員が出席
(9月4日～9日 於オランダ)
- そ の 他
上高地山岳研究所建設にあたり、委員会を設け600万円を
目標として募金活動を実施した
(注) 第289回(10月22日)小集会、大岳山集中登山は
雨天のため中止

7) 絵 画

作 品 名	作 者	備 考
白富馬 田士山 群代池 伊豆半 針本 釘本 初冬 ブカ 「鳥」 ン モ メル 後立 カンチ ンゲ ユ 沢より 北高 北岳 槍穗ケ	郎吉太郎 之太三吉 清猪鶴猪 村木井木 中茨中石茨 石茨渡石 ジュラギント 中 村 山 里 高足中	A—50 A—25 変型 6 10 10 10 6 25 10
岳麓樺猿島峠連峰 白山の半木種高山ルテ から種ノルトンス峯 の両カッラグラ連 ンチエフシラウ高 ンゲより北穂岳 沢北穂夏 高尾淹切 穂ケ	松古三吉 吟猪之 田木辺井鶴 中 村 山 里 遠立村 源一郎 清太郎 寿 男 宏太郎	油 “ ” 墨油 “ ” 絵 “ ” 絵 彩繪グ “ ” 彩繪 水プリント 油水彩版油 “ ” A—50 A—25 変型 6 10 10 10 6 25 10

△未 扌 金

摘 要	金 額
刊行物出版費	881,980
製本費	40,300
印刷費	20,000
品(圖書備品)	4,800
運搬費(圖書運搬)	1,500
合 計	948,580

昭和48年度事業計画

1. 登山の指導奨励に必要な集会、研究会、講習会の開催
- (イ) 集 会
- ・小集会(報告会、講習会、シンポジウム)於・本年 年間 12 回
 - ・支部長会議 於・本年 4 月 12 日
 - ・現地支部長会議 於・十勝岳 6 月 15 日～17 日
 - ・木暮理太郎生誕百年祭 於・金山平 5 月 19 日・20 日
 - ・上高地山岳研究所開所式 於・上高地 6 月 1 日
 - ・第 27 回ウエストン祭 於・上高地 6 月 2・3 日
 - ・年次晩餐会 未 定
 - ・来日外国登山家との交歓 臨 時
- (ロ) 研 究 会
- ・高所登山研究会 11 月
 - ・雪崩シンポジウム 未 定
- (ハ) 講 習 会
- ・冬山技術講習会 未 定
 - ・岩登技術講習会 未 定
- (ニ) 展 覧 会
- ・年次晩餐会に際し「この一本展」に準ずる展示を行う。 12 月
2. 登山施設の改善の促進、その他登山のための適切な事業
- ・上高地に「山岳研究所」を開設 (月 6～10 月)
3. 山岳遭難の予防とその対策に関する企画および指導
- ・富士山頂に夏山診療所開設 (7 月～8 月)
 - ・各大学医学部山岳部による夏山診療所に対する援助(7 月～8 月)
4. 自然保護活動の推進
- ・自然保護委員会で国立、国定公園内における自然保護運動に協力
5. 海外登山の企画および指導
- ・海外登山における無事故登山を目的に会員へ適切なる指導を行う
6. 機関誌などの刊行
- ・「山岳」67 年の発行 (8 月)
 - ・会報「山」12 回発行
 - ・「山日記」昭和 49 年度版発行 (11 月)
 - ・「山岳」覆刻版発行 第 2 年 2 号 (5 月) 第 2 年 3 号 (9 月)
 - 第 3 年 1 号 (1 月) 第 44 年 1 号 (10 月)
 - ・「会報」覆刻版発行 1 号～50 号
 - 51 号～100 号 (12 月)
 - ・「この一本展」目録発行
 - ・蔵書目録発行(本会蔵書、和、洋書)
 - ・J.A.C 紹介英文パンフレット発行
7. 目的を同じくする国内および国外団体との連絡をとり、情報の交換ならびに機関誌の交換を行なう
- ・ダーズリンに於ける国際会議に出席して海外登山家との交流
 - ・世界の登山団体と連絡をとり、情報の交換ならびに機関誌の交換
8. その他
- ・目的を達成するための必要な事業を行なう

2) 現金及び預貯金

種 類	預 入 先	金 額
現 普 通 預 金	協和銀行 三菱銀行 東京銀行 八十二銀行	41,607 220,473 1,571,915 45,933
通定 定期 預金	三愛銀行 協和銀行 三菱銀行 第一勧業銀行 日本信託銀行 東京振替貯金	58,272 1,000,000 2,000,000 1,500,000 750,000 145
金 錢 替 預 託 金	神田支店 神田橋支店 本 店 松本支店 神田橋支店 神田橋支店 深川支店 本 店	20,901
合 計		7,209,246

(注) 終身会費積立金	1,000,000
図書購入基金積立金	10,000

3) 刊行物・服飾品棚卸現在高

摘 要			金 額
刊 服	行 飾	物品(山岳、会報等) (ネクタイ等)	1,302,388 630,800
合 計			1,933,188

4) 未收金

摘 要	金 額
刊行物売上未収	982,200
山日記印税	500,000
広告料	116,000
上高地山岳研究所建設費貸付	2,000,000
合 計	3,598,200

5) 什器備品

品名	数量	摘	要
宛名カードケース	1		
新刊書ケース	1		
セフネス金庫	1		
宛名印刷機	1		
ローヤルタイプライター	1		
電話プロジェクター	2		
スチール雑誌架	1		
椅子	4		
机、テーブル	47		
スチール黒板	17		
両開き書庫	2		
フアイリリング、キャビネット	8		
マップロック、カー	6		
コンパック移動書庫	1		
キーパー引違書庫	4		
移動式踏書庫	2		
スチール書架	1		
組立用本棚	2		
スリク一本除ン	1		
電気掃除機	1		
ホー除ン	1		
手提金庫	3		
複写機	1		
タイブタン	1		
電気冷蔵庫	2		
応接セッ	1		
湯沸器	1		
折りたたみ運搬車	1		
書架	1		
パンチカードケース	1		
耐火金庫	1		
耐書架	1		
テープレコーダー	1		
		47.	4.17 購入
		"	6.26 "
		"	7.14 "
		"	7.31 "
		"	8.31 "
		48.	10.31 "

6) 図 書

種 類	冊 数
和 洋 書 書	2,980 1,127

昭和48年度収支予算表

自 昭和48年4月1日
至 昭和49年3月31日

収入	予 算	前年度予算	増 減
科 目			
経 常 収 入	12,150,000	7,000,000	5,150,000
入 会 金	1,050,000	1,000,000	50,000
会 費	11,100,000	6,000,000	5,100,000
過 年 度 会 費			
終 身 会 費			
事 業 収 入	5,500,000	5,590,000	△ 90,000
山 岳 廣 告 料		800,000	
会 報 廣 告 料	1,000,000	200,000	
山 日 記 印 税	500,000	500,000	
刊 行 物 売 上	3,700,000	4,040,000	△ 340,000
服 飾 品 売 上	300,000		300,000
そ の 他 事 業 収 入		50,000	△ 50,000
雑 収 入	1,070,000	470,000	600,000
利 息	250,000	470,000	50,000
山 岳 診 療 助 成 金	500,000	200,000	500,000
貸 室 料	20,000	250,000	
そ の 他 雑 収 入	300,000		50,000
未 収 金	3,598,200		3,598,200
過 年 度 未 収 金	1,598,200		1,598,200
山 岳 研 究 所 付 金 貸	2,000,000		2,000,000
小 計	22,318,200	13,060,000	9,258,200
前 年 度 繰 越	7,209,246	6,453,810	755,436
合 計	29,527,446	19,513,810	10,013,636

支 出

科 目	予 算	前年度予算	増 減
運 營 管 理 費	9,837,000	7,328,000	2,509,000
手 文 印 交 通	2,267,000	2,050,000	217,000
具 刷 通 信	100,000	80,000	20,000
家 保 管 諸 税	450,000	420,000	30,000
電 話 料	650,000	300,000	350,000
電 會 交 備 振	1,600,000	1,850,000	△ 250,000
支 福 會 雜	3,410,000	1,290,000	2,220,000
部 利 員	50,000	21,000	29,000
運 厚 章	150,000	100,000	50,000
營 生 製	60,000	57,000	3,000
費 費 費 費	150,000	150,000	
費 料 費 費 費 料	170,000	150,000	20,000
費 料 費 費 費 料	50,000	50,000	
費 料 費 費 費 料	150,000	150,000	
費 料 費 費 費 料	70,000	350,000	△ 280,000
費 料 費 費 費 料	100,000	90,000	10,000
費 料 費 費 費 料	200,000	100,000	100,000
費 料 費 費 費 料	30,000	120,000	△ 90,000
費 料 費 費 費 料	30,000		30,000
費 料 費 費 費 料	150,000	100,000	50,000
事 業 費	9,024,000	6,860,000	2,164,000
出 國 調 査 研 究	7,333,000	5,430,000	1,903,000
版 書 研 究	250,000	200,000	50,000
外 諸 事 業 費	520,000	100,000	420,000
そ の 他 事 業 費	351,000	100,000	251,000
山 岳 研 究 所 建 設 費	370,000	150,000	220,000
予 備 費	200,000	580,000	△ 380,000
予 基 本 財 産 繰 入 金	2,000,000	300,000	1,700,000
過 年 度 未 収 金	1,050,000		1,050,000
山 岳 研 究 所 付 金 貸	948,580		948,580
小 計	22,859,580	14,488,000	8,371,580
繰 越	6,667,866	5,025,810	1,642,056
合 計	29,527,446	19,513,810	10,013,636

昭和四十八年度通常会員総会報告

昭和四十八年度通常会員総会は、去る四月二十一日（土）午後三時から、向井ビル四階会議室において会員八十七名出席（他に委任状多数）のもとに開会された。

先ず開会の辞のあと、三田会長の挨拶があり、直ちに議案に入った。

一、昭和四十七年度事業報告、財産目録および収支決算案承認の件
全会一致で承認（本誌六、七頁）

二、昭和四十八年度事業計画および昭和四十八年収支予算案承認の件
二、三の質疑の後、全員一致承認（本誌七、八頁）

三、昭和四十八年度役員選任の件
総会開催通知で、前もって全会員に通知してあった理事候補者二十名、ならびに監事候補者二名を異議なく承認

四、会長、副会長選任の件
役員の中から今西錦司氏（一一一七番）、を会長に、中屋健氏氏（一二四七番）、織内信彦氏（一八四六番）の二氏を副会長にという提案を盛大な拍手の裡に承認

五、評議員選任の件
総会開催通知で全会員に知らせてある評議員候補者二十名全員を承認

六、昭和四十八年度除籍の件
新定款により、昭和四十四年度以降分会費未納の会員、昭和四十五年度以降分会費未納の会員、昭和四十六年度の分会費未納の会員、三年度分を一括して除籍する旨の報告を承認決定（別項）

七、定款一部変更の件
クラブ・ルーム移転に伴う本会事務所の住所を変更する件を承認

以上で総会を無事終了

ついで支部報告が行なわれ、信濃支部から、アナンブルナ遠征、ウエストン祭、上高地山荘等についての報告があったのを皮切りに、北海道、岩手、

秋田、新潟、山梨、静岡の各支部から報告があった。なお山梨支部は支部長三井松太郎氏逝去により目下支部長欠員で近く選出が行なわれるとのことであった。

昭和四十八年度通常会員総会出席者

浅原重雄、小原勝郎、堀田弥一、中屋健氏、伊藤秀五郎、浜口欣一、渡辺公平、今井雄二、竜崎一郎、青木昇、浜野吉生、松家晋、岩崎三郎、松岡良助、松本熊次郎、三田幸夫、岩永信雄、佐藤久一郎、神原忠夫、伊倉剛三、藤島敏男、井口正男、望月達夫、林和夫、広羽清、李敏晃、関口周也、中島寛、岸栄、森川洋佑、須田紀子、山崎安治、近藤信行、山口健児、堀山毅、平井拓雄、笠原潤二郎、山村正光、神崎島男、渡辺節子、野口未延、佐藤テル、徳久球雄、田村宏明、武田満子、古谷聖司、山本朋三郎、山本良三、小野利次、日高信六郎、吉沢一郎、柴田均二、松田雄一、河野悠二、沼倉寛二郎、北島光子、山口節子、梅野淑子、関田美智子、織内信彦、島田巽、板倉勝正、小林重一、津田周二、安彦六郎、百瀬舜太郎、浜野正男、折井健一、小川清巳、春田俊郎、今成三三、原真、宮下秀樹、浅見正夫、北沢清行、亀山義夫、千代田英次、浦野勇逸、斎藤桂、福田良、吉武正子、黒石恒、国見利夫、赤瀬暁。

除籍について

総会において分会費未納者の除籍が決まりましたので、次号において除籍者名を掲載します。総会以降に未納分の会費を納入された方は、復活会員といえます。

図書室便り (昭和48・4)

新刊図書受入報告

信濃毎月新聞社寄贈

(1) 掘勝彦著『ヒマラヤ チョウと花の旅』 昭和47

信州大学山岳会寄贈

(1) 信州大学ネパールヒマラヤ実行委員会編『アンナプルナ・II』 昭和47

定期刊行物受入報告

【部報 全報】

(1) 山村民俗の会『あしなみ』 No. 136 (48-2)

(2) ここの山岳会『月報』 No. 140 (48-4)

(3) 兵庫山岳連盟『兵庫山岳』 No. 71 (48-4)

(4) 京都山岳会『京都山岳』 No. 576 (48-4)

(5) 長野県山岳総合センター『所報』 No. 8 (48-3)

(6) 日本自然保護協会『自然保護』 No. 129 (48-4)

(7) 低く山を歩く会『低山』 No. 95

(48-5)

(8) 東京都山岳連盟『都岳連通信』 (48-3)

(6) 日本山岳協会『登山月報』 No. 49 (48-4)

(10) 日本登山協会『山と雪』 No. 180 (48-4)

【雑誌】

(1) 『アルプ』 No. 182 (48-4), No. 183 (48-5)

(2) 『岳人』 No. 311 (48-5)

(3) 『山と溪谷』 No. 416 (48-5)

(4) 『創文』 No. 115 (48-1/2), No. 116 (48-3)

【その他】

(1) 東北大学山岳部・山の会『会報』 No. 9 (47-12)

(2) 日本山岳協会 高橋定昌氏『訪台使節団報告書』 71〜72

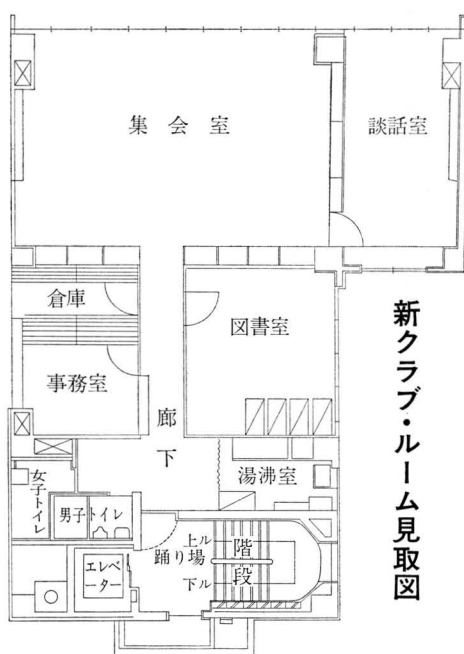
(3) 日本ヒマラヤ山岳協会 稲田定重氏『ランタンヒマール冬期踏査報告』 71〜72

【新着海外雑誌】

1. 『Alpinismus』 73-3.

2. 『Appalachia bulletin』 Vol.

新クラブ・ルーム見取図



会務報告

四月理事評議員会

(十一日午後六時本会ルーム)

出席者 三田会長、中屋、板倉、伊倉、松丸、宮下、近藤、丹部、須田、堀山各理事、今井監事、望月、織内評議員

△議事

・昭和四十七年度収支決算報告

昭和四十七年度収支決算について説明があり、これを承認。四月十八日監査を受ける。(中屋)

・四十八年度収支予算案修正の件

ルーム移転準備委員会が検討の結果家賃が予算をかなり上回ることが予想されるので、予備費一五〇万円計上したが、これを二〇〇万円としたい。

この件承認

△報告事項

・ルーム移転の件

不動産業者の仲介により、七、八件の候補地を見て廻った結果、湯島一六―「さくらビル七階」が好条件で契約が出来そうなので、交渉中である

早急に話をすすめる、総会に提案出来るよう努力したい。(伊倉)

39, No. 1, January '73, Vol. 39, No. 2, February '73, Vol. 39, No. 3, March '73.

3. "Der Bergsteiger" Jah. 40, März '73.

3. "Österreichische Alpenvereiner" Jah. 27, Heft 11/12, November/December '72, Jah. 28, Heft 1/2, Jänner/Februar '73.

5. "Panorama of Slovakia" '72-6.

6. "Rivista mensile" Anno 93, N. 11, Novembre '72.

7. "定" No. 13, '72, No. 14, '73.

・足立源一郎、山下一夫両氏逝去の件

足立源一郎氏が三月三十一日、山下一夫氏が四月十四日に亡くなられたので、再辞と生花をお供えした。

四月臨時理事評議員会

(二十一日午後二時クレール)

出席者 三田会長、中屋、林、板倉、伊倉、宮下、松丸、近藤、須田、堀山各理事、今井監事、望月、織内、小原各評議員

△議事

・ルーム移転の件

移転先候補地であった「さくらビル」の所有者、利根川商事と交渉が出来た。家賃三十四万円、保証金七百三十五万円で話し合いが出来た。保証金の不足分は会員より募金をした。

この件承認

・定款一部改正の件

ルーム移転にともない、定款第二条を次の如く改正し、本日の総会に提案して承認を求めることにしたい。

この件承認 (中屋)

第二条 本会は、事務所を東京都文京区湯島一六―「さくらビル七階」におく。

会員異動

校名変更

五八七五 広島修道大学体育局山岳部

旧島島商科大学山岳部 (48年4月)

終身会員 三三四 百瀬舜太郎

一六八三 榎本 豊松

二二八一 渡辺 正臣

退会会員 (48年4月) 六六一 原田 忠俊
六六一 深田 騰之
物故会員

四三六 上村伯太郎 昭和四八・四
・五逝去

九五四 山下 一夫 昭和四八・四
・一逝去

五二一 佐々木健太郎 昭和四八・四
・一逝去

・一五逝去

会員名簿 1971 訂正

二頁上八行三九〇 一〇六四

六六頁上一行一〇四九 電話(〇七八)

五七五 一四六

ルウム日誌 (48年4月)

3日(火) 明治大学山岳部 婦人懇談会

9日(月) 集委会

11日(水) 海外連絡委員会

12日(木) 臨時理事評議員会

13日(金) 財務委員会

14日(土) 山日記の会

18日(水) 青年懇談会

19日(木) 青年懇談会

20日(金) モンゴル親善登山隊歓迎パ
ーティ

21日(土) 支部長会議 (於ニート
キー)

23日(月) 昭和四十八年度通常会員総会

ルウム移転準備委員会

24日(火) 学生部委員会

26日(木) 学生部委員会

29日(日) 図書委員会

☆ 上高地山岳研究所

募金状況 (48・5・30 現在)

※応募件数 四八四件

※金額 四、〇九五、九〇三円

※目標額対比 八一・九%

研究所のオープンも近づきました。

会員諸兄弟の一層の御協力を願いま
す。

クラブ・ルームについて

クラブ・ルームはおかげさまで、先月中旬無事移転を終りました。お茶水駅から東京医科歯科大学をまわって湯島通りに出ると、新しい八階建のビルで、「さくらエックスレイ株式会社」という赤い看板がすぐ眼につく「さくらビル」の七階が、私達のクラブ・ルームです。医科歯科大学構内を横切っても、すぐ湯島通りに出ますが、道路を横断できず危険でもありますので、信号のところで横断して下さい。前の頁に部屋の見取図を画いておきましたが、内装もだいたい終わり、前の向井ビルのルームに比べると、広くて明るい感じがしますし、談話室、図書室なども落着いております。

けれども、クラブ・ルームは何の困難もなく移転したわけではありません。この場所を探すまでの苦勞、数々のむずかしい交渉、そして引越しの苦難は大へんなものでした。図書だけでも四千冊以上、本号七頁の什器備品の目録をごらんになれば、個人の家の引き越しとは桁違いの規模であることがお判りでしょう。もちろん、全会員の熱烈な支援のもとに果せたわけですが、特にほとんど一か月ぐらい、ルームの引越しの事に専念された、松本熊次郎、伊倉剛三の両会員の努力は大へんなものでした。また青年懇談会の主として大学生の会員諸君、図書委員会の方々、そして事務局の皆さんにも特に御尽力を願いました。これらの方々に厚く感謝するとともに、大いにこのクラブ・ルームを利用し、会を盛立てたいと思います。

会費納入について

新しい規約により、昭和四十八年度の会費は、六月三十日までに納入することが義務づけられておりますので、期限内に納入されるようお願いいたします。国内在住会員の昭和四十八年度の会費は、東京都、神奈川県、埼玉県、千葉県在住者は年額五千円、それ以外の府県の方は三、五〇〇円(支部費別)です。

おしらせ

日本ネパール協会から「第二回ネパール研究学会」についての連絡がありましたのでおしらせします。

第二回 ネパール研究学会

日時 六月二十三日 午後一時

開会

研究発表 一時—六時

総会及び懇親会 七時—九時

会場 滋賀県大津市琵琶湖畔

名鉄マリーナホテル

参加費 研究学会参加費五百円

(会員外一千円)

宿泊及び懇親会費 約四千円

申し込み 至急事務局まで

事務局宛先

新宿区諏訪町九三—六

日本ネパール協会事務局

(二〇〇—二八—七)

豊中市春日町四—〇一五

(〇六八—五四—八三〇三)

日本ネパール協会関西支部事務局

担当者代表 高須賀久仁子

詳細は事務局にお問い合わせ下さい。

あとがき

「山岳図書を語る夕べ」は集会の記事ですが、含蓄のある内容です。一面に置きました。故石井鶴三先生の歌は珍しく、美しい版画が光彩を放ちます。「ウェストン祭の歌」も心温まるお話しです。今号は総会の関係で会務関係が多くなりました。

(T・H)

昭和四十八年六月十日発行

東京都文京区湯島一—六—一

利根川商事(株)さくらビル

発行所 社団法人

日本山岳会

編集代表 春田俊郎

(813)(二二八六(代表))

振替口座東京四八二九番

東京都港区赤坂一丁目三番六号

印刷所 株式会社 技報堂

“ヒマラヤ山岳の旅18日間”

問い合わせ先

三井航空サービス株式会社

旅客部 団体課

東京都港区新橋1—18—1
電話(504) 0271 (大代表)

期 間：昭和48年11月11日～11月28日

昭和49年3月10日～3月27日

費 用：¥358,000 (ローン可)

定 員：15名

御案内人：エベレストビューホテル社長
宮原 巍氏

安全対策：医師並びに参加者の皆様の安全を図るために、現地人医師を第9日目より15日目までエベレストビューホテルに滞在せしめると共に、酸素ボンベの用意も致しております。

日 程：

第1日目 東京→ニューデリー

第2日目 ニューデリー→カトマンズ

第3日目 カトマンズ滞在

第4日目 カトマンズ→ポカラ

第5日目 ポカラ滞在

第6日目 ポカラ→カトマンズ

第7日目 カトマンズ滞在

第8日目 カトマンズ→ルクラ：徒歩にて
モンジョへ(モンジョテント泊)

第9日目 モンジョ→ナムチェバザール

第10日目 ナムチェバザールより徒歩にて
エベレストビューホテルへ

第11日目 エベレストビューホテル滞在

第12日目 エベレストビューホテルよりタンボ
チュヘトレッキング(タンボチュヘ泊)

第13日目 タンボチュヘよりエベレストビュー
ホテルへ

第14日目 エベレストビューホテル滞在

第15日目 エベレストビューホテル→カト
マンズ

第16日目 カトマンズ滞在

第17日目 カトマンズ→カルカッタ

第18日目 カルカッタ→東京

茗溪堂＝山の本

東京都千代田区神田駿河台2の1・Tel(291)9442振替東京24723

ブータン感傷旅行

小方全弘著

〈菊判280頁〉定価980円

森林・草原・氷河

加藤泰安著

〈A5判482頁〉定価1,500円

すこし昔の話

初見一雄著

〈四六判400頁〉定価1,200円

遠い山・近い山

望月達夫著

〈B6判334頁〉定価960円

山の古典と共に

大島堅造著

〈四六判280頁〉定価1,500円

雪山・藪山

川崎精雄著

〈A5変型判340頁〉定価1,200円

雪原の足あと

坂本直行者著

〈B5判206頁〉定価2,800円

遙かなる未踏の尾根

マカルー1970年

日本山岳会東海支部

〈B5判430頁・カラー64頁〉定価4,800円

山日記1973年版

日本山岳会編

〈A6判344頁〉定価850円

山 岳

日本山岳会編

〈A5判〉

66年	2,300円
65年	2,000円
64年	2,000円
63年	2,200円
62年	2,000円
総索引	1,000円

国立公園カレンダー

国立公園協会編

〈A5判リング綴り〉定価960円

屋久島・美しい豊かな自然

赤星 昌編

〈B6判202頁〉定価480円

山で唄う歌1集・2集

戸野昭・朝倉宏編

〈A6判126頁〉1集240円・2集280円

いろいろばた

南会津山の会

〈B24どり判320頁〉定価1,900円

シブトンの自叙伝

未踏の山河

大賀二郎・倉知敬訳

〈A5判440頁〉定価1,900円

日高山脈

北大山の会編

〈菊判362判頁〉定価2,200円

山に忘れたパイプ

藤島敏男著

〈菊判584頁〉定価2,500円

日本の山旅

足立源一郎スケッチ帖

〈A変型208頁〉定価3,600円

登頂ゴジュンバ・カン

高橋 進編

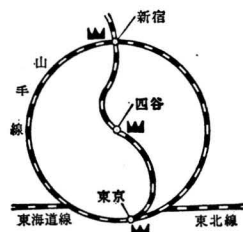
〈A5判350頁〉定価900円

登山・スキー用具専門店

山の店

大阪市北区梅ヶ枝町101

TEL. 06(362)5736

●買いやすい
山の店●北へ来たら
山の店●フレッシュな
山の店

四谷店 東京都新宿区三栄町三番地

TEL (351) 7432・1912

八重洲口店 東京都中央区八重洲二の五

TEL (271) 1560・8575

新宿店 新宿ステーションビル四階

サービスショップ

TEL (352) 6564

日本信販加盟店



山友社 たかはこ

山とスキーの専門店

片桐

東京都文京区湯島3丁目38-9

片桐 盛之助

電話 東京(831) 1794・6680番

なるべく なんにも
持たない方がい
けやどし、どうして
要るものがある。
なにしろ人間ですかり
そして、山ですかり
かたろぐシンテイ
でんや 281-8456
中央区・八重洲4丁目1

秀山荘

登山とスキー具

イワタ

東京都中央区日本橋通2-1

PHON: 271-7686・1718

登山用具の専門店

好日山荘

東京店・中央区銀座2-4-5 (561)3600・(567)9031
 東京店・中央区銀座2-4-4 (561)0966 スキー店
 大阪店・北区堂島橋上1丁目47 (364) 0933 (代)
 福岡店・東区 町 1-4 (28) 3440

